

テーマ

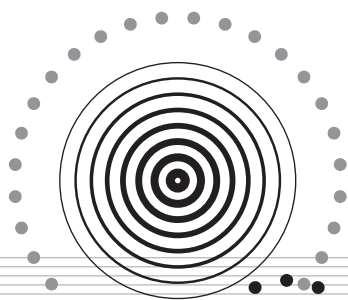
# 子どもの教育目標を どこに置くか

第11回 **立山倶楽部**会議報告

平成17年11月17日(木)



(財)富山県ひとづくり財団

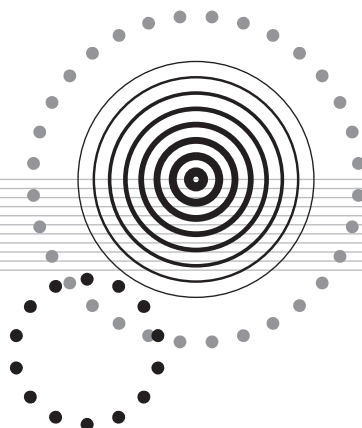


「立山倶楽部」

I

会議概要

# 目次



## I 「立山倶楽部」会議概要

日 程 .....	1
参加者 .....	2
写 真 .....	4

## II 「立山倶楽部」会議内容

開会あいさつ .....	中沖 豊	5
趣旨説明 .....	木村尚三郎	6
話題提供 .....	西館 好子	7
各参加者より .....	小林 登	10
.....	佐藤友美子	11
.....	米田 祐康	13
意見交換 .....		15



日程：平成 17 年 11 月 17 日（木）



場所：富山全日空ホテル



テーマ：「子どもの教育目標をどこに置くか」

### 「立山倶楽部」会議開催の趣旨

国際的に活躍されている方々から、未来への洞察、世界の潮流、人間のあり方などについて、自由かつ率直に意見交換していただくための交流の場として、平成 6 年から「立山倶楽部」会議を開催している。

この会議の意見交換内容から、時代を先取りする見方・考え方を県政の創造的な施策に反映させるとともに、グローバルな視点から未来を考える人材の育成に資する。加えて、参加者に「とやまファン倶楽部」の会員となっただき、全国から富山を応援していただく。



# 参加者



代表世話人

木村 尚三郎

東京大学 名誉教授



小林 登

チャイルド・リサーチ・ネット 所長



佐藤 友美子

サントリー(株) 次世代研究所 部長



## 西 舘 好 子

NPO法人 日本子守唄協会 代表



## 米 田 祐 康

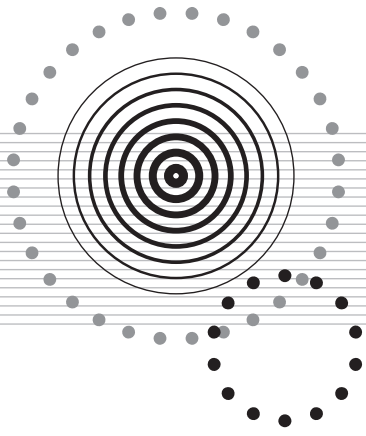
(株)ニッポンジーン 代表取締役社長



## 中 沖 豊

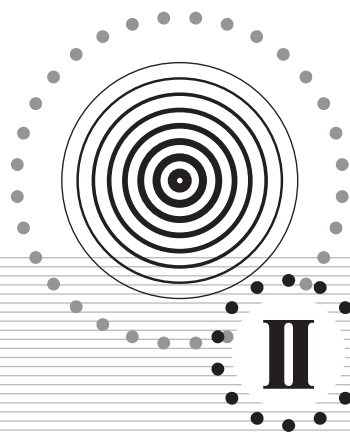
(財)富山県ひとづくり財団 理事長

(敬称略)



# Photograph





「立山倶楽部」

Ⅱ

会議内容



## 開会あいさつ

中 沖 豊

(財)富山県ひとづくり財団 理事長



秋空に立山連峰が大変素晴らしく映えておりますが、本日は木村先生をはじめ、皆様方には大変ご多忙のところ、この「立山倶楽部」にご出席いただきまして本当にありがとうございます。心からお礼を申し上げます。

この「立山倶楽部」会議は平成6年に第1回会議を開催しまして以来、今年で第11回を迎えます。これまで木村先生をはじめ、歴代の出席者の皆様方から、富山県の発展のために大変意義あるユニークなご提言をいただきてまいりました。この席を借りまして厚くお礼を申し上げます。

近年は、ますます仕事につきまして難しい時代を迎えておりますが、富山県では、学校と家庭、そして地域が連携して、子どもたちが自分たちで選んだ仕事に挑戦し、また社会のルールを学び、将来の自分の生き方を考える活動として、「社会に学ぶ 14歳の挑戦」という取り組みを行っております。17年度からは富山方式が全国のモデルになりまして、文部科学省の「キャリア教育推進プロジェクト」という形で行われております。

また、当財団におきましても、子どもたちの創造力・自己表現力・柔らかな思考力を育てる「きらめき未来塾」、最先端の科学技術を体験する「仕事場拝見」事業、将来の夢の実現に向けて、第一人者のもとへ入門する「夢の卵」事業を実施するなど、いろいろと努力をいたしております。

最近、子どもの教育目標をどこに置くのかというこ

とが学校教育でも非常に大きな課題になっているわけですが、ぜひ皆様方には幅広い見地からご検討いただきまして、富山県は前々から人を育てるということを柱にしているわけですが、これからの富山県の人材育成についてもさらに努力をしていきたいと思っております。

皆様方の忌憚のないご意見、ご提言をお聞かせいただければ大変ありがたいと思う次第でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

## 趣旨説明

木村尚三郎

東京大学 名誉教授



木村代表世話人

もともとは知事の賢人会議のようなものとして、最初は非公開でこの会議が始まりました。今は公開に変わっておりますが、でも基本的に話題はざっくばらんに、いわゆるシンポジウムとは違って自由に、できれば自分の立場も超えているいろいろ話し合うということです。これまで21世紀の富山の姿や富山の経済、女性の問題、あるいは観光の問題等々、毎回テーマを決めてやっておりました。今回は、子どもの教育について話し合ったらどうかということになったわけです。

子どもをこれからどうやって育てていくかということは、今、非常に難しいときに来ているのではないかと思います。昔は国家目標がはっきり定まっていた、たとえば富国強兵だったら、どのような人材を育てるかということで、しっかりと国家目標に合った子どもを育てなければよかったのですが、今は国家目標がなくなりましたし、企業も目標がはっきりしなくなってきました。

21世紀、日本がどういう国になるのか、よく分かりません。総理大臣に聞いても分かりませんし、もちろん教育関係者の方もはっきりしないでしょう。日本に限らず、これからどういう生き方をしていっていいのか、これが全世界的に問われています。

そういうときに子どもをどう育てるかという問題があります。子どもというのは、決して親の私有物ではないのです。未来からの預かり物ですから、自分の子どもがいようと、いまいと、みんなが関心を持たなければいけ

ない問題だと思います。

今回お集まりいただいた方は、それぞれ世界の第一人者です。しかも直接教育に携わっておられない方々から、外側から広い視野で、ずけずけものを言っていたらこうということです。子どもの教育だけではなく、私たちのこれからの生き方にかかわる問題だと思うので、ぜひざっくばらんに話しただければ幸いです。

最初にキーノート・スピーチをいただいておりますが、今回は、今、猛然と火の玉になって日本全国から子守唄を集めておられる西館好子さんから、よろしく願います。

## 話題提供

### 西 館 好 子

NPO法人 日本子守唄協会 代表



西 館

動物学者の中川志郎さんから「人間は動物とどこが違いますか」と質問されました。私は、言葉という文化を持つとか、文明を作り、進歩させられるとかいうことしか答えが出てこなかったのです。すると「では、動物と違って、なぜ私たちはこんなに文明を盛んにしたのですか」と追い打ちをかけられて、またまた、はたと困りました。

すると、「生物の中ではいちばん歴史の浅い人間が、なぜ今のようにこれだけの文明を使いこなすようになったのか、それには原因があるはず。動物は、自然の中から観察や体験を通し模倣します。人間も、小さいときは必ずまねから出発しています。しかし、人間だけは次の世代にそれを伝え、つなげる能力を持っているのです。つまり、人間は一代ですべて終わるのではなく、できなかったことは次の世代につなげていこう、その次にできなかったことはまた次の世代に、というような発展的継続能力をきちんと持っている生物です」と言われました。

その文明によって今私たちは大変な危機に陥っています。進みすぎてしまった文明に侵され始めてしまっていないでしょうか。21世紀、それを暗示するかのようその幕開けはテロで始まりました。私たちは時代の中の危機感を一身に背負った世代に突入した、と思うのですが考え過ぎでしょうか。

少子化や、子どもにまつわることを見ても、未来を担う子どもたちの問題をもっと直視すべきです。それは基

本的には大人の問題だからです。ということは、大人たちの世代が何かをし、何かに目覚めなければ、いつまでたっても子どもの問題にはたどり着かないだろうと思っております。

私は中川先生の話の踏まえて、「人は人にしか伝えられないことがある。そのことを忘れてはいけないだろうか。文明に頼り切って、人にしか伝えられないことを無視してはいけないだろうか。今の日本にいちばん欠けている部分はそこではないだろうか」と思いました。

私が子守唄協会を設立した最大の原因は5年前です。5年前、子どもの虐待がやっとマスコミなどで取り上げられ、それはモグラ叩きのように叩いても叩いても起きてくるという時代の始まりでした。「これはいくら叩いても無理なのではないか。豊かになればなるほど、人を思いやらなくても済む世代が来ている。そうすると、虐待は止まらないだろう」と小林先生が言われましたが、その通りとなりました。それでも、私は虐待にこだわって、カウンセリングを勉強し、相談室を開きました。

そこで気づいたのは、大人には自立する力、働く能力があれば、今の日本では生活に困るとか、飢え死にするとかいうことはないですだからなんとかできるのに、親を通して世の中で生きている子どもは、そこから救われることはないのです。マスコミや教育業界が子どもを救おうと言っても、手を出すことはほとんどなく、私は子どものために大人の世界を変える仕事をしなければいけないと思って、ずっと模索しておりました。

そんな時、警視庁に取材に行った折、「まだ子守唄を聞いていられる世代の子どもたちが、こういう不幸な目に遭うのだよね」という一言を聞いたときに、「子守唄」が私の頭の中にピーンと来たのです。最近聞かれない、唄われない、そしてなくなりつつあるこの唄が、一体どんな意味を持つのだろうか、そして、本当になくなっていいものなのだろうかというところから、猛勉強をしました。この唄が、いかに人が人に伝えていく大事な要素を持っているか、また医学的に、どれほどその子の成長と性格を一生涯にわたって作っていくか。あるいは、今の犯罪のものが親と子の問題にあるとすれば、その中心になっていることが全く見直され、改善されていないのではないだろうか、そのため何をすべきかということで、子守唄が大きなテーマとなったわけです。

それから2年間、ほぼ全国を歩きました。それは子守唄を探す旅であり、人間回帰をする旅でした。5年前、「もう一度よみがえらせよう、親と子の絆」と言ったときは、PTAも教育委員会も、国も、誰も振り向きませんでした。今、それが当たり前と言われるようになり、天皇家のご結婚式にまで「親と子の絆」が出てきたとき

は、私はびっくりしました。もっと早くこのことにみんなが気づいてほしかったという気がしました。

もっとも、そのことを感じたのは子守唄だけではありません。わらべ歌にしても、読み聞かせにしても、人が人にしか伝えられないことを、ソフトとして人の心を育てるものとして気づいていたら、今のような殺伐とした世代は来なかったかもしれないということを念頭に置きました。

私は2年間、それこそ茶髪にした女の子たちにも、町を歩くたびに「子守唄を聞いたことがある？おばあさんとおじいさんから何か話を聞いたことある？」ということ聞き出していきました。そして、やっと分かりました。その土地にはその土地の気候と風土と風習と慣習と伝統などが息づいており、何よりも故郷や母や祖先の歴史が眠っているということです。そのことに気づいたときに、一つの筋脈を見つけたような気がしました。

寒い国には寒い国なりのお母さんの子どもへの思いがありました。東北の子守唄はほとんど脅し唄で終わっています。寒い中では早く寝てもらわないと困るのです。昔は夜なべ仕事当たり前で、子どもに早く寝てほしいから、「早く寝ないと怖いものが来るよ」という唄いが伝わっているのです。外は雪、家の中には火があります。そこで子どもはお母さんにしがみついて寝ています。その風景は、必ずその子のDNAに入っていくのです。

中国地方に行けば行事がたくさんあります。その行事は子守唄の中にもたくさん入っています。九州に行けば、海の向こうの国がすぐ見えます。そうすれば、そこに生まれる唄は自ずとその土地のにおいを持って変わってきます。北海道は開拓民で、明るい気持ちがあればほとんど開拓できなかった、となると、子守唄は開拓民の叫びとして残っています。

こういうものが、「古いから、もういらないよね」と言って消えていいものか。この中にある、人を人にしてきたエキスを、私たちは今こそ呼び戻さなければいけないのではないだろうか。それは郷土への愛であり、お母さんを中心とした家族の愛であり、やがてそれは社会の愛になり、その先では、世界に出たときの愛情になっていくのに。

今、たくさんの嫌な事件が起きています。原因は常に親と子の関係にあり、その幼児期にあるのです。だから、教育とは大人の問題だという認識を持ったほうがいいと思います。

また、子守唄は、忙しいお母さんが唄わなくても、おじいちゃん、おばあちゃんが唄ってあげることで心の中に刻みつけるものではないでしょうか。そして、その土地の歴史を、その子が肌で持つべきものではないでしょ

うか。それがまず基本であると私は思っております。

今、市町村合併が進んでいます。五つの町が合併すれば文化が合併して大きくなるということも一理ありますが、五つの文化の特色がなくなるということもあると思います。心の問題は、合併と同時に消え去るものがたくさんあります。ですから、町長さんが泣きながら唄を持ってくるということがよくありました。

先日も、熊野古道という世界遺産になった洞川の町長さんが訪ねてきました。「おいよ 才兵衛」という洞川の吉野山の利権を唄った子守唄があるのです。「たぶん、私の代でなくなるでしょう。だから、この唄をぜひ協会に保存しておいてほしい」と言われて、預かりました。「おいよ 才兵衛はまだ戻らぬか」という悲しい、きれいな曲なのですが、これが吉野の桜、大峰山の利権を争ったときできた子守唄でした。その町長は「平城京と平安京が変わるときにできている子守唄もありますから、預かってください」ともおっしゃっていました。

日本の歴史の中には、聖徳太子の子守唄も残っているのです。それをもとに、日本はどんな国なのか、どんな歴史と伝統と文化を持つのか、そして、その人が伝えてきたエキスを私たちはどう暮らしに生かしていくのか...いや待てよ、これは私たちの母親の時代までは当たり前に行っていたことなのだ。これを力に、やり続けていこうと思いました。

ここ富山では、江戸時代の売薬がいちばん初めに興りました。実は、富山の薬売りは、子守唄にいちばん貢献した人たちです。江戸時代中期の江戸に「ねんねんころりよ おころりよ ぼうやはよい子だ ねんねしな ぼうやのおもりは どこへ行った あ山越えて 里へ行った 里の土産に なにもろた でんでん太鼓に しょうの笛」という子守唄があるのですが、この唄は江戸で流行って、あっという間に全国に広がったのです。それは、参勤交代の武士のお土産だったこと、旅芸人によって広まったこと、猿回しのサルが子守唄であったことなどに加えて、一日20～30キロ歩くという富山の薬売りによって伝播されたのです。

富山の薬売りは、背中に薬の荷を負って、そして紙ふうせんを持って各地を歩きました。この人たちは富山県を出て、その唄を唄いながら、「ねんねんころりよ おころりよ。さあ、おかみさん、この薬を買いなさい」と宣伝しつつ、その薬を全国に売り歩いたのです。そのときの唄が江戸の子守唄でした。これは唄いやすく、覚えやすかったので、その土地に薬売りが来るたびに、お母さんは覚えました。そして、そのお母さんの言葉を借りて、方言や子どもの名前、その土地のにおいが入り、やがて全国に伝播していったのです。

流通の中で文化がどれほど大きな役をしたかを如実に物語っているのが子守唄でした。そういう宝物を、富山という国は持っているのです。薬を唄と同時に売り歩いた文化を持った富山の薬売りは、人が人に伝えることを真っ先にした方たちではなかったらどうかと、私は思っております。

21世紀は恐らく子守唄の最後の世代になると思います。なぜならば、団塊の世代が初めておじいちゃん、おばあちゃんになるのです。この人たちが孫に何かを伝えていかなければ、次の世紀はなくなってしまいます。もし今の教育ということを考えるならば、子どもに何かをするのではなくて、大人自身が心の豊かさをどうやって身につけていったらいいだろうか、あるいはどういう生き方をして、子どもと接したらいいのだろうかということが、いちばん大きな課題になるのではないのでしょうか。

いくら子どもを生めと言っても、お金をあげるからとか、働くための施設を作りますから、というのは間違いです。「私はどうしてもこの人の子どもが欲しい」と思って生むのであって、決して人口のために生むわけではないのです。家庭も、生き方も変わります。でも、私たちは日本に生まれて、日本という国をどれだけ愛していただろうかということを、次世代の子どもに伝えるということが、基本ではないだろうかと考えております。

私の運動は、本当にささやかですし、根気のいる仕事ですが、私が生きてきたということの証しとして、それを誰かに伝えることができる、とてもいい心の教育になっているということを信じております。もし教育ということがあるのであれば、自分の住んでいる場所を愛してください。そして、自分を生んでくれたお母さんに、生んでくれてありがとうと言えるような、そんな関係を作ってほしい。子守唄協会は、別に子守唄を唄う会ではないのです。別に「ねんねこ」でなくていい、軍歌であろうと、流行歌であろうと、口をついて出た唄はみんな子守唄です。家庭の中で子守唄が唄えるような環境を作りたいという運動を、私はしております。

やがて、あと5年したらエイズが蔓延するでしょう。エイズを防ぐのは薬ではありません。エイズを防ぐのは笑って「おかえり」と言ってくれるお母さんの笑顔なのです。それさえあれば、子どもは「ただいま」と帰ってくるのです。それが未来の大きな宝になるということ、私は次世代に伝えたいのです。帰れる故郷があることで、心の支えができるのですから。

今日は人が人でしか伝えられないことこそ教育だというお話をさせていただきました。どうもありがとうございました。

木村 どうもありがとうございました。大変素晴らしいお話でした。子守唄はその土地の暮らしと命に込められていくということで、子守唄を通して、親から子、それから孫へと、その心、その歴史が伝わっていき、人間と人間との生き生きした関係が生じる、これが教育の原点ではないかというお話で、大変面白かったです。

ヨーロッパにも同じことがあります。水売り歩きときに、街角で水の容器を置いて、まずいい声で歌うのです。歌うと人が集まってきます。今度はその人たちになぞなぞを問いかけるのです。みんな答えが分からなくて、何だろうと考えていくと、水売りが答えを教える。「何だ、そんなことか」とか、「なるほど、そうか」と感心します。その後で、何の商品特性もない水を買ったわけです。人間関係の基本が歌だったのです。その点で薬売りと共通性がある、非常に興味を引かれました。ありがとうございました。

西館 たぶん世界でも共通の思いはあるのではないのでしょうか。ベトナムで、クチというところの塹壕を見ましたら、東京から福島ぐらいの長さがあるのですが、真っ暗な中に一つだけ部屋があったのです。それはホーチミンの命令でベトナムの民謡と子守唄と一緒に唄うところで、それを今でも記憶しております。

木村 歌を歌うと心と心がつながりますよね。「よいとまけ」の労働歌や、田植え歌、茶摘み歌、それから、お経もそうで、あれを通して生きている人と死んだ人が結び合ったわけです。御詠歌や、高岡の万葉集朗唱の会もそうですが、声を共に出そうという話ですよ。昔は子守唄とともにミルクをやったものですが、今、お母さんは黙ってやっていますから。あれでは金魚にえさをやっているのと同じで、親と子の結び合いはできませんね。

ということで、親と子のつきあい、子どもをいかに育てるかということを医学の面からとらえておられる小児医学の最高権威、小林先生から、よろしくお願ひします。

## 各参加者より

### 小林 登

チャイルド・リサーチ・ネット 所長



小林

お母さんが子守唄を歌っているときに、子どもは何を感じているだろうかということを、西館先生のお話を伺いながら思っていました。赤ちゃんは言葉の意味は分からないと思うのですが、お母さんの歌う歌のリズムとかピッチ、抑揚を感じているに違いないと思います。私はそこに非常に重要なヒントがあるのではないかなと思うのです。言葉が出てくる2歳ぐらいになれば、多少は言っていることの意味もできると思いますが、それまでは、リズムやピッチのような感性的なものの意味が非常に大きいのではないかなと思います。

人間がいろいろなコミュニケーションをやっているときの、やり取りする情報には二つの側面があると思います。一つは理性の情報（logical information）、もう一つは感性の情報（sensitive information）です。理性の情報が分からなくても、親がその子に伝えたい気持ちは、感性の情報で十分に伝えることができると思います。もちろん言葉ができれば、論理的に物を考え、「どうしていけないのか」と言えば、「人に迷惑をかけるからやっちはいけないのだ」と説明をすれば、それなりに子どもも理解していくと思います。

私は、今の教育の中で、感性を育てるような教育が足りないのではないかなと思います。脳の構造からいきますと、脊椎動物になったときに初めて脳ができました。それは、呼吸、循環といった生命のプログラムを持った生命の脳。その次に出てきたのは、原始的な哺乳動物、たとえばカンガルーのような、本能や情動のプログラムを

持った脳です。生命のプログラムをうまく働かせるには、あるいは子孫を残すにはどうしたらいいか、たとえば体を養うためには食欲がなければいけませんし、敵と戦うためには怒りがなければいけませんから、そういう本能や情動のプログラムを作って生命のプログラムの働きを強くしたわけです。最後に我々も含め、霊長類になると、高等哺乳動物になって、知性や理性のプログラムを持った脳が出てきました。知性のプログラムが、それまでにできたプログラムをコントロールすることになったといえます。

生命の脳、情動や本能の脳、それから知性の脳。そういうところから考えると、教育では知性の脳を育てるために先生方は苦勞をしていらっしゃるのですが、感性の情報で動く部分の脳を、もう少し働かせるような工夫をする必要があると考えています。子守唄は、そういう意味で情動を働かせる点で子育てに重要です。

そこで、よりよい教育のために私が最近やっていることは、みんなで一緒に考えようということです。20世紀の学問は、専門化・分科し深く突き詰めていったけれども、それを横につなぐ組織がない。特に人間の営みに関しては、そういう考え方がないと感じて解決できないのではないかな。教育問題はまさにそうだと思います。それで、ヨーロッパではずっと育ててきた人間科学（human science）がありますが、それを子どもに持ってくると、子ども学（child science）になると思います。それが私のやっている仕事の大きな部分です。

子どもの問題を、学校の先生も医者も心理学者も教育学者も、みんなで話し合う場を作って解決していかない限り、問題は解決しません。たとえば、感性の情報が重要だから、脳の機能の理解が重要だからといっても、それを教育の研究にどのように組み込んだらいいかという話になると、ばらばらではできない話であって、みんなが話し合わなければいけないと思うのです。それで、私は「日本子ども学会」を作って、その考えを発展させていきたいと思っております。今日は教育関係者が多いと伺っていますので、ぜひ「日本子ども学会」に入って大いに発言をしていただきたいということを申し上げたいと思います。

木村

ありがとうございました。子どものことを考えるということは、まさに私たちの生き方について20世紀的な分析的考えではなく、総合的にそれぞれの立場を集めながら考えていきたいというお話でございました。

感性が大事だというのは、子守唄は赤ん坊には分からないけれどもというお話がありましたが、お経もそうで

すね。何を言っているか分からないのですが、朗々とい  
い声で歌っていただくと、生きている人と亡くなった人  
が何か結ばれていきますよね。それをつかえつかえ、  
だみ声でやられたら、とてもお布施などできませんけれ  
ども（笑）。やはり感性の部分というのは非常に大事な  
のではないかと思います。

小林

それが何となく今の時代は軽く見られている  
ようなのです。

木村

今、教室で、立って一人ではっきりした声  
で教科書を読むということをしていないのだそうで  
す。黙読が中心らしいです。

大事なお話をしていただきました。ありがとうございます。  
ました。

それでは、佐藤さん、次世代の幸せづくりのために、  
一生懸命獅子奮迅の活躍で頑張っておられます。政府の  
観光立国懇談会のときも委員としてだいがご発言されま  
した。よろしくをお願いします。

## 佐藤 友美子

サントリー(株) 次世代研究所 部長



佐藤

最初に少し研究所のことを紹介させていた  
だきたいと思います。私のおりますのはサント  
リー次世代研究所といいますが、今年の3月までは、不  
易流行研究所という名前でした。会社の中の部署の単位  
ですので、5名しか専任メンバーはおりません。所長は  
東京におります。ただ、社内の事業のための研究は一切  
やっておりませんで、自主研究だけをやっております。  
社内からの委託も社外からの委託も一切受けておらず、  
恐らくかなり特殊なところですよ。

実は名前を変えたときに、一つの思いがありました。  
不易流行研究所では生活の中の楽しみということの研究  
しておりました。生活文化を考えるサントリーとしては  
非常に重要なテーマだと思って、直接的ではありません  
がサントリーのことを考えながらやっておりました。平成  
元年から16年やってきて、去年いろいろ考えました。も  
う一人ひとりの欲望というのはかなり満たされたのでは  
ないか。では今、何が大事なのか。小林先生もおっしゃ  
いましたが、一人ひとりはまだ十分好きにできているの  
で、では、考えたとしたら、コミュニケーションはどう  
なっているのか、若い世代はどうなっているか、そこが  
非常に大きなテーマになっているのではないかと思いま  
した。皆様にお酒やお水を買っていただいて、私は研究  
をしているわけですので、やはり社会に役に立つことを  
したいと思って、名前を変えようと思いました。

不易流行研究所という名前は大変いい名前だ、この名  
前のおかげで覚えていただけました。次世代研究所にな  
ったらどこがやっているか分からないと言われるのです。  
たぶん、16年間、この名前のおかげで守られて研究所を  
やってきました。そろそろ自立のときだと思い、あえて  
挑戦しようということになって名前を変えました。

研究所では本を何冊か出しておりますが、10年ぐら  
い前から、生活の中の楽しみだけではなく、世代間ギャ  
ップの問題や家族の問題などをテーマにしてきました。そ  
れは他人事ではなく、自分自身の生き方と非常に密接に  
かかっていると思っております。自分が子どもで悩ん  
だら海外に行って、海外の家族はどうやって子どもを育  
っているのだろうかということを調べて、『これからの  
家族のために』という報告書を作ってしまったりました。

最近出しましたのは、『U35世代 僕と仕事のピミョ  
ーな関係』というものです。私の息子はまだ大学生です  
が、下手をするとフリーターになるかもしれないという  
危機感もあります。今の若い人たちにとって仕事とい  
うのはどういう意味があるのだろうかということを考えよ  
うということで、調査をいたしました。

今日の「子どもの教育目標をどこに置くか」というテ  
ーマで考えますと、先ほど西舘さんがおっしゃった、人  
間はいろいろなことを伝えていくことができるというの  
は確かだと思うのです。でも、一人ひとりの人間は一人  
ひとり生きていくしかなくて、親がどんなに立派であ  
っても、その子は子なりに悩んで、自分のものをつかま  
えていかないと一人前の人間にはなれないという側面が  
あるのではないかと思います。子どもが自立するという  
ことを大きなテーマにしようと思っております。

自立というのは、一人で生きるというだけではなくて、

人に助けってもらって生きるということを学ぶことでもありますし、またできないということに気づくことでもあると思うのです。そういう意味で、人間が自立していくというのはどういうことなのだろう、どうすれば自立できるのだろうかということを実際に考えなければいけないと思っております。

海外7か国で国際調査をしました。スウェーデン、イギリス、フランス、イタリアなどに行きますと、家庭の中で自立ということがテーマになっているのです。日本の家庭で、子どもの意見をちゃんと聞くとか、子どもを自立させようという話は、大人になったら出てまいりますが、小さい時には話題にもなりません。でも、調べた国では本当に2歳、3歳のときから子どもの意見はどう聞いたらいいか、子どもに自分で意見を決めさせるためにはどうしたらいいかということを考えているのです。社会の仕組みもそのようになっているのではないのでしょうか。

今いろいろ問題になっていることは、大人の社会の甘えです。日本人は、私も含め、子どもを大事にしすぎて、それはよかれと思ってやっていて、決して子どもをスポイルしようと思ってやっているわけではないにもかかわらず、結果的にはスポイルしているということがあり、それが今のいろいろな問題を引き出しているのではないかと感じています。

つい最近、河合雅雄先生という、隼雄さんのお兄さんにあたる動物学者の方のところにお話を聞きに行ったら、「すべての動物は自立のために子育てをするのです」とおっしゃいました。それは、別に崖から突き落とすというだけではなくて、慈愛を持ちつつ、どう自立させるかということの葛藤の中で生きているのだというお話でした。人間も、そういうことを動物として同じように考えることが必要なのではないかと思っております。

もう少しだけご紹介をさせていただきますと、フリーターとかニートとか言われる前から、仕事というものについて特に考えていたのが、今の若い人たちにとって、夢を持つというのはどういうことなのだろうかということです。

夢というのは自分がこうなりたいというだけではなくて、社会の中で自分をどう位置付けるかだと思っていました。そのとき、仕事というのは非常に大事な一つのキーになっているものなのではないかと思って、仕事のことを調べ出したのです。いろいろな仕事をしている人たちを調べていくと、すごく元気のない層にぶち当たりました。それが『U35世代 僕と仕事のピミョーな関係』という本のテーマでありますサラリーマンの人たちなのです。

昔は考えることなく食べるために働いてきたと思うのですが、今の若い人たちは豊かですから、食べるために働く必要はなくなっています。すると、自分の生き方と仕事を一致させたい。サラリーマンはそれができていない人たちだという評価で、転職になったら何をするか分からないということもありますし、現実の鏡である人たちは元気に見えない、とても幸せに生きているように思えない。そんなものになぜならなければいけないのだ、というのが若い人たちから聞いた意見です。多くの若いサラリーマンは、そのサラリーマンを実際にやっているわけですが、すごく不充足感があります。若い人たちに聞くと、好きなことを探すのが大事なのですね。好きなことが見つからなかった、消去法で選んだ職業という感じを持っておりました。

それではいけないと、私たちはサラリーマンの中で比較的元気な人たちを選んでヒアリングをしました。すると、好きなことを仕事にしなくても仕事を好きになることができるのではないかと。自分の成長実感というのは、好きだから得るものではなくて、苦勞の中にもありますし、さまざまな関係性の中にもあるので、そういう現場にどうやって自分がモチベーションを上げて関わるかということが大事なのではないかと思いました。

教育の問題は仕事の問題と非常に絡んでいまして、先ほど木村先生がおっしゃったように、目標がある時代は当然そこに勉強もついてきたわけです。でも、その大きな目標が揺らいでしまったときに、勉強するモチベーションも削がれてしまっていることが分かります。それと、上の世代はどちらかというと、好きなことはやりたかったけれどもできなかったの、若い世代にできるだけ好きなことをやらせてあげたいという思いもあります。

ただ、現実問題、そんなに簡単に見つかるものではないですから、私は『13歳のハローワーク』の呪縛だと言っているのですけれども、好きなことが見つからないと生きていく意味がないのではないかと考えている人たちもたくさんいますし、大学生も好きなこと探しをしています。力のある人は一歩出ていくわけですが、そこに踏みとどまっている人たちもたくさんいます。『13歳のハローワーク』を書いた村上龍さんが、「好きなことは見つけるものだと思っていたけれども、出会うものだった」ということを書いていて、「そうなのですよ」とすごく納得しました。

前に出て、自分が出会う機会をどう作っていくかということ、これから若い人たちにちゃんと教えていかなければいけないのではないかと考えています。今の若い人たちの悩みは、豊かになったからこそその悩みだと思うのです。その中で新たな自立のためのキーワードをいく



つかさ出さなければいけないのです。

それは居場所づくりなどでも言われているように、親にできることもあるけれども、親だからできないこともあるのです。世間のほうができることもあるのですから、居場所を与えるのではなくて、親とは全く違う仕事をしている人とか、違う考えを持っている人たちにどうやって出合わせるかということが、すごく大事になります。

それから、今の人たちは失敗しないで要領よく生きるということを覚えています。失敗する機会、それからいつも人に保護されている状態ですから、人の役に立つことを感じるような場をどのようにして作っていくかということが大事なのではないでしょうか。

私たちは豊かになって、通過儀礼がなくなったという言い方をします。たぶん、通過儀礼は必要だと思います。いくら語り継ぐことができて、一人ひとりがやはりどこかで力を得なければいけない。そのための苦勞の場があって、そこをどう抜けさせるかという機会を若い人たちにあげることが必要で、通過儀礼なしに豊かにして、そのまま社会に出て行くだけでは、本当の力はつかないのではないか、その覚悟を大人の世代が本当にできるかどうかというところに、今、差し掛かっているのではないかと感じております。

木村

ありがとうございました。今、若い人の望みはお金持ちになることだと聞きました。お金持ちになってどうするのか、そこから先は分からない。夢のない世界です。大人が確かにそうなのでしょうね。おっしゃるようにサラリーマンは、いちばん成功しなかった人生を歩んで来ているのかもしれない。農業みたいに自分なりにやっている人たちは、自分の仕事の全貌が見えていますから、それはそれなりに生きるということがあるわけです。大きな企業に入っている人は何があるのかよく分からないということになります。

働くというのは、「はたを楽にするから」という俗説があります。本当の語源はよく分からないのですが、いい俗説だと思います。人がにこにこしてくれれば、それはそれで意味があるのですよね。

儀式が大事だというのは、私は本当に学校関係者に強調したいと思います。形を通して心を伝える、生きる意味を伝えるというのは、今みたいなのんびんだらりの世の中では、こんなに大事なことはないのではないかと。相撲だって、あれは土俵があるから意味があるのです。土俵のないところで相撲を取ったって、野相撲と言って全然腕は上達しないといえます。制約があるから腕が上がるのです。

ありがとうございました。また後でお話を伺います。

では、米田さん、農学部ご出身なのですが、今、薬品会社の社長さんでいらっしゃいます。富山の成功者でおいでになります。よろしくお願ひいたします。

米田 祐康

㈱ニッポンジーン 代表取締役社長



米田

23年ほど前、アメリカでずっと勉強をしていて、帰ってきて日本で最初のバイオベンチャーを富山で作りました。それが今のニッポンジーンです。富山は薬の伝統のある地なので、バイオ産業はできるのではないかと、自分のふるさとでそういう仕事をしていきたいという気持ちで、富山に帰ってきたのですけれども、23年経った今、富山のバイオ産業はいよいよ花開いてくるのではないかと感じております。

ただ、富山のバイオ産業に将来どうしても人材が必要になってくるわけで、そういう人材が少しでも増えてほしいものですから、自分はボランティアで中学校や高校に出かけています。自分の出身校や他の学校に行って、バイオの話をつかりやすく面白くしてやるのです。すると、私の話を聞いてくれた学年で、バイオ関係の大学進学が突然増えたということがありました。私はこれを後で聞いて非常にうれしく思いました。すぐに効果は出てきませんが、5年、10年すれば、そういう人たちがリターンして富山に戻ってくる。そうすれば、富山のバイオの人材が出るということで、今、そのような目標を持っております。富山で第二、第三の田中耕一さんが出てほしいという気持ちでおります。

最近の子どもは理科離れが進行しています。10年ほど前から4年間、私はNHKの番組審議委員をやっておりました。そのときに私は、子どもたちが理科を好きになるような番組を少しでも作れと相当言いました。今も、

理科離れではなく理科大好きっ子を作りたいという気持ちでいたところ、富山県理科教育振興会の会長を引き受けることになりました。

今日の教育目標というところで、バイオだけではないとおっしゃるかもしれませんが、私は、理科の大好きな子どもは、たとえば自然をよく観察するとか、生物を飼育してみるとかいうことを通じて、自然、生物を慈しむという気持ちがだんだんその子どもの優しさとなり、愛情、情けの分かる子どもになっていくのではないかと、期待しているのです。

出生率が1.3前後ですと、あと数百年もすれば日本民族はいなくなってしまうのですが、何も不妊症の人を妊娠させるのだけが出生率を上げるわけではなく、子どもを生みたくなるような、また生んでもちゃんと育ていけるような社会を作るのが出生率を上げることになるのではないかと思います。そういう中でも、少ない子どもを大事に育てていかなければいけない、いい子どもに育てなければいけないということになると考えております。

西館さんの話で、富山の薬売りが、親と子の絆をつなぐ子守唄の伝播にも一役買っているというところで、富山というのは素晴らしいところなのだと思って聞いておりました。小林先生の話ではないのですが、子どものときに聞いたもの、小さい子どもはお母さんの言葉が分かるはずがないのですけれども、そういうリズムというものが記憶に残っている。その話を聞きながら一体記憶というのは何なのだろうかと考えていました。

記憶とはRNAだと言われてはいます。私などは、RNAの分解酵素が強いものですからすぐ物忘れしてしまうのですが（笑）、小さいときに覚えて全く忘れない数字があります。「89,276,529」これは何年か忘れましたが、日本の人口です。そういうものはたぶん、RNAではなくて、もっと安定なDNAに組み込まれているのではないかと考えています。

先ほど、西館さんと話しているときに、子守唄の宝庫というのは老人ホームだとお伺いしました。老人ホームに行っても最初は何も出てこないけれども、西館先生がいろいろとお話を聞いて、お年寄りに、その土地だったらこういう子守唄がありますねというふうな誘い水をちょっとしますと、次から次へと出てくるというのです。

ですから私は先ほどの話を聞いていて、今ぱっと見て覚える記憶と、脳みそに染み込んでいるような、私はDNAにインテグレートされているのではないかと思うのですが、そのような記憶と二つあって、DNAに組み込まれてしまった記憶が出てくるのは、何かインダクションをかけると、それがぱっとRNAになって記憶が蘇ってくる、なんていうへんてこな仮説を立てました。DN

Aに組み込まれた子守唄が、将来の子どもの教育、人格形成に大きな役割を果たしているのではないかと考えております。

ですから、私は理科というものを通じて、子どもたちの人格形成につながればと期待して、そのような運動を続けていきたいと考えております。

**木村** ありがとうございます。理科をどうすれば好きになるかというお話でした。米田さんにお伺いしたいのですが、今の学校教育は考えさせる教育とよく言いますよね。でも、一応考えさせるのでしょうか、結論はちゃんと先生には分かっている、その結論にどうやってうまく誘導していくかということで相当みんな教育されているので、あれは巧妙な詐欺ではないかと（笑）。結論は決まっているのですからね。子どもたちは自分で考えたように思い込んでいるだけで、本当の創造という力は育たないのではないのでしょうか。

だから、本当に先生にも答えが分からなくて、先生も子どもたちも一緒になって考えるのだったらいいと思うのですが、そうではないのではないかと思うのです。理科が好きになるにはどうしたらいいか、ちょっと教えていただけませんか。

**米田** 山に出て遊び、海に出て遊ぶ、といったことではないかと私は思っております。私自身もずっと研究者で、今は経営者をやっています、教育者でも何でもないので、そういうことを言う資格は全然ございませんけれども、子どもというのは、自然からそういうものを学んでいくのではないかと考えております。

それから、自分の経験から言うと、木村先生がおっしゃった、分かっていないものを見つけるのが研究です。私は、実はそれが大学院の研究のメインテーマになりましたが、最初とんでもない現象を見つけたのです。それを指導教官に話したら、「嘘、それ、本当かな。おかしいよ」と、かえって先生は私をたきつけたのです。私も意地になってそれを調べましたら、とんでもないものが出てきて、「ええっ？」ということになったのですが、そういうことを考えますと、私の大学院の教授は非常に教育者だったなと思っております。

**木村** それは大変いいお話ですね。先生が壁になって、ぶつかる役割をしないと子どもは伸びないのですよね。頑迷固陋である必要もあるのですよね。ありがとうございます。



## 意見交換

木村 これからはフリートークで。

西館 教育というのは、幼児からそれこそ老人になっても必要で、ここで教育が終わるということはないと思うのです。だから難しいのは、教育論というのは、それぞれの人がそれぞれの立場で言うと、自分の言っていることが正しいと思う人がぶつかるから、先ほど小林先生がおっしゃったように、教育というものの一面は分かるけれども、一つずつ取ってみるとばらばらなのです。その一貫した人間教育に関して目を向ける論は、まだ日本に成立していないのではないかという気がしました。

木村 私は戦時中、学徒動員で工場へ行かされまして、はんだごてで電気製品を作っていたのですが、ちょっとミスをするとはんだからシュッと煙が出て、皮膚の焼けるにおいがするのです。あれは今でも覚えています。これはまさに感性の問題なのですが、大げさにいうと、自分の命にかかわるようなアクシデントがあるわけですが、自分自身の感性と結びつくようなことは、いつまでも覚えているのです。私は、これは理性にも大きな影響があるのではないかという気がするのですが、小林先生、先ほどの話の続きを…。

小林 当然、理性も関係あると思います。教育では脳のどんなプログラムを使っているかといったら、「記憶する」、「考える」、「学ぶ」、「まねる」など、いろいろなプログラムがあると思います。

胎児は、子宮の出っ張りに頭が引っ掛かったら一生懸命外そうとします。手を突っ張ったり、足を突っ張ったり、なかなか外れない。すると首をぐっと前にまわすのです。それは、手や足を突っ張るといった情報を脳の中で処理して、解決する方法を選んだということ、それこそ考えるプログラムを使っていると思うのですね。

また、おなかの中の胎児がにんまり笑っているという例もありますので、そう考えると、人間の脳の基本的なプログラムは、全部胎児期に親によって作られて持って生まれてくるわけです。しかし、その後の育児や保育や幼児教育、あるいは学校教育で、その遺伝子で決まったプログラムをうまく組み合わせて、たとえば、今先生に伺ったようなご体験も有効に利用して脳を育てているの

です。そして最終的には、教育は人間の前頭葉の知性のコントロールに持っていく技術ということになると思うのです。ですから、基本的に持っているプログラムをうまく使わせて組み合わせないといけないと思います。そのためには、楽しく勉強することですね。

赤ちゃんは遊びと学びが一緒です。だけど、学校に入って初めて遊びと学びが分かります。最近の子どもは我慢をしきれないので、授業なんかやっていると申しますが、もし、その子どもが興味を持てるようなやり方で教えたら、そういう子どもだって夢中になると思うのです。だから、そういう技術を研究しないとイケないと考えています。

中川先生のお話が出ましたが、人類だけが教育をするといえます。人間の頭脳はチンパンジーの2～3倍あります。遺伝子は2～3%しか違わない。にもかかわらず、人間だけはちゃんと子どもに教えることをするので、人間だけが非常に特殊で、教育という技術を駆使して、生まれながらに持っている能力を、高度な精神機能のコントロールに集約して集中システムにする。つまり、魚の脳、カンガルーの脳、霊長類の脳という話をしましたが、そういう進化のプロセスがあるということは、もとはばらばらだったのです。だから、赤ちゃんや子どもときにはばらばらのプログラムを、教育はどうやって知性のコントロールに持っていくかという技術と考えたいのではないかと思うのです。ここでいう教育は、広く、育児・保育も含めます。

木村 education という言葉はeducere というラテン語から来ていて、これはもともと、産婆さんが出かかった子どもを産道から「引っ張り出す」ことなのです。引っ張り出したあと、白菜のように荒塩でもんで洗って、汚れを落として、布でぎりぎりに巻いてしまう。昔は手足が曲がっている子どもが多かったので、そうならないようにと、ちょうど木をしつけするように手を両方、胴体のところにつけて、足を真っすぐ伸ばさせて、全部巻いてしまって、全然動けない。これはまさに不自由の極致を赤ん坊にまず経験させて、それを生後半年とが、10か月経って取るのです。

だから昔の絵は、キリストもそうですが、みんな赤ん坊はぎりぎり巻きになっています。あれが教育だったのです。今はさすがにやりませんが、不自由を与えることが、逆に創造的な力を生むということもあるのではないかと思うのですが、先生はどう思われますか。

小林 そうですね。人間の情動はどういう役割をしているのかという考え方があります。進

化心理学では、情動は生命のプログラムをコントロールするために発達したものだ。それまでは原始的な哺乳動物と対比されるくらいの脳だったというのです。

情動をポジティブなものやネガティブなものに分けると、たとえば「喜び」などのプログラムは、知性のプログラムの下にあり、生命のプログラムをコントロールしているのです。ですから、生きる喜びでいっぱいになる、それでわくわくするというのは、そういう関係で説明できると思います。

では、「恐れ」や「怒り」という情動はどうして進化したか。それは生存に対する戦いのため、さらには集団生活を始めたため、原始的な哺乳動物で発達したと考えられます。子どもが、大人になって理性でコントロールできるようになるには、プログラムを使って、うまくコントロールする術も学ばなければいけないわけです。

ですから、そういう意味で、先生がおっしゃったように苦い経験をすることもあると教育的効果はあると思います。ただ、それが強すぎるとまずい。たとえば、虐待された子どもたちの脳の構造を調べてみると、海馬のような記憶に関係するところ、あるいは情動に関係するところの発達が非常に遅れているということがはっきり分かっています。

ですから、生まれながらにして持っているプログラムを、いい方法で使わせて育てていく、そのために教育の技術というものがあるのだらうなと思います。

佐藤

私は教育そのものを見ているわけではないのですが、外発的な要因というか、論理付けが効かなくなったので、一人ひとりがどのように発見したり、成長したりというのを感じられるかというのがすごく大事になってきています。

今の人たちはいろいろ調べて、話していても非常に賢くはなっていて、大人の世界のことを非常に分析的に見ています。たとえばよく出世しているお父さんであっても、仕事はよくできるけどライフスタイルは嫌いだとか、教師のことも、ひいきされていい成績をつけてもらっても、それは必ずしもうれしいとは言わない。評価が甘いのではないかと、このポジションにいるからではないかと、分析的に見るところがあるように思います。先ほどの教育の話でも、答えが分かっていることをやってできるということは、別に自分にとっての成長機会にはなっていない、要領がいいとか、競争には勝ったという感じになっているのではないかと思います。ですから、自分自身が内発的な動機付けで知的好奇心を満足できたか、成長実感が本当にあるか、そういうところへ持っていく必要があります。

日本の教育システムはよくできているとは思いますが、知識にウエイトが置かれていますし、今は非常にアウトソーシング的に実体験とは切り離して特別なものとして、囲い込んでいるところがあります。そういう意味では総合学習というのは悪くなくて、実感がないから覚えたことでもすぐに忘れてしまうので、生活の中で教育をもう一回位置付けたら、内発的なものにどう働きかけるかが大事なのではないかと。ただ、よく言われることですが、先生のほうにも生活実感がありませんから、非常に技量が必要です。

私の子どもであきれかえったことがあるのですが、「置き勉」といって、学校に教科書をみんな置いてきていたのです。試験の前日にも持って帰ってこない。これはどうしたのかと、先生に聞きましたら、「私が置いておくように言いました」と。「ほかの人に迷惑がかかるから、教科書は全部学校に置いておかせました」と言われて、びっくりしたことがあります。みんなに迷惑がかかるという体験すらさせてもらえなかったのだなと。

本当は、人間関係の中で迷惑をかけたりかけられたりしながら、だんだんこの辺だなというのを学んでいくところが生活の中にあり、学校でもあってしかるべきなのに、意外にそうないなくて、合理的なシステムの中に入ってしまったのではないかと思います。最近、鷲田清一さんが、『想像のレッスン』という本を出されたのですが、イメージーションが、今本当に乏しくなっているのではないかと。

ある仕事の本を書いた方が、自分がやるべき仕事とはどんなことかという、「やらなければいけないこと」「やりたいこと」「できること」が人間にはあって、その重なったところがたぶんあなたの仕事でしょう、という話をされたのです。その話を私がよそですると、「でも、やりたくない仕事だけやらせているところがたくさんあるのではないですか」という話がすぐ出て来るのです。やりたくない仕事というのは、今この時点で言えばそうかもしれないけれども、本当にそうなのだろうか。常に世の中は変化していくわけで、与えられた仕事だって、変化の中でどうクリエイティブしていくかと思えないといけない。だけど、そこで思考が止まってしまうのです。

これはたぶん、いろいろなところで思考停止状態があるのではないかと。人間が本来持っている知的的好奇心とか、もを変えていくとか、その場に対応して何かやるということに対する信頼感が、今すごく失われているのではないかと。それは学校の先生と生徒の間も、組織の上司と部下の関係もそうかもしれない。大きな企業でいろいろな事件が起こっていますが、それぞれよかれと思って、その人の役割の中でできることだけをやっている。その

中に、会話や対話、お互いを知るといった行為がなくなっているのではないかと。そこを埋めていかないと人間というのは成長できないし、いい社会はできないのではないかと。子どものことを思って、そういうことまで最近考えてしまいます。

木村

ありがとうございました。全くそのとおりです。全体がどこか偏っているのではないかと。今おっしゃった思考停止。

旧東ドイツからティーンエイジャーの子どもたちが、東京の中野の主婦のところに来てきたそうです。それで、秋葉原の電気街に連れて行こうか、それともディズニーランドに連れて行こうか、その人が考えていたところ、子どもたちが開口一番、「谷中の墓地へ行きたい」と。それで、自分が行ったことはないのですが、谷中の墓地に連れて行った。そしたら、卒塔婆がいっぱい立っています。これは何だと聞かれて答えられない。そこに梵字が書いてある。何が書いてあるかと聞かれても、何も分からない。自分が心の世界について何も知らないということにそのときに気がついたと、エッセイに書いてあります。ある懸賞論文の最優秀賞です。そうしたのを選考委員長の私ですけれども（笑）。

日本人は何も知らないわけです。外国人は日本の心の生活を知りたい、アメリカ人だったら、武士道のことを知りたい。今のアメリカ大統領夫人も書道をやっているそうです。なのに、日本人にはそういう方面が全く欠けているのではないのでしょうか。

それから感性教育ですが、外国人が日本の美術館や博物館を見て、これはササン朝ペルシャの影響がこの文様にありますとか、これは宋代の筆遣いの流れですとか、いろいろと解説が書いてあるのですが、その外国人に「では、どこに日本の美しさがあるのですか」と聞かれたときに、誰が答えられますか。どこも教えていないのです。日本の美しさは何かということについて、共通の理解がないのです。日本の美しさを考える国民会議というのを、僕はこれから政府を動かしてやりたいと思っています。

今年の1月1日にNHKテレビで同じことを聞かれた人がいます。ニューヨーク在住の日本画家、千住博さんが、キャスターから聞かれて言ったのです、「それは静けさと華やかさの共存だと思います」と。「静けさと華やかさが一緒にいる美しさは、日本以外にありません」と、そういう言葉を本当に初めて聞きましたね。わび・さびなんて言われても一般の人には分かりませんよね。

日本の美しさについての共通理解すらない。これは一

体何を教えたいのですか。怒りを禁じえない。日本の心の世界がないと、理科の創造的世界はないのではないかと思います。

今、お菓子が配られました。これが日本の美しさの一つですね。

同じ赤でも、ヨーロッパ人はまず血の赤を考えます。赤の広場や赤旗、革命や、情熱、怒りなどを連想するのですよね。日本の赤というのは、鳥居がそうですが、安心の赤で、植物系なのです。秋のさまざまな紅葉などを見て、それを愛してできた色ですよね。

スイスのいちばん古い時計メーカーにブランパンというメーカーがありますが、その社長は日本が好きで、女性用の時計の腕輪のところに鳥居の朱の色を使っています。全体に日本の美しさにはそういう、先ほど静けさと華やかさと申しましたが、安心がありますよね。夜、桜の花びらがはらはら散っていくような、静けさと華やかさ。

ルイ・ヴィトンのバッグがなぜ好まれるかということ、茶色はおばあちゃんの色だし、そこに日本の家紋がデザインとして散りばめてあるのです。18世紀末から、落ち着いた色調と日本のデザインで作られているのですが、世界中の人が愛していますね。

悔しいことに、我々の正倉院御物のデザインなどは、今、全部イタリアに集録されていて、そこから出てくるのです。それは先ほど申しましたように、我々が自分の美しさに気がついていないから、向こうに取られているのではないかと思います。

今、全世界的に不安な世の中で、安心が大事なのですが、私たちの心の世界というのをもう一度見直す必要があるのではないかと。親も上司も気がついていなくて、子どもがお金持ちであるというのは、本当に今、悲惨な世の中ではないかという気がしますが、これから子どもたちをどのように育てたいとお思いになるか、ちょっと先生方にご意見を伺えたらと思います。どこからでも言いたい人から言ってください（笑）では、西舘さんから。

西舘

今日は教育関係者の方が多いと伺いました。今、教育者の質が問われていると思うのですが、教育関係者の方は本気で一生懸命取り組んでいらっしゃると思います。

私たちは今、メディアを通してほとんど主張が一律化されてしまうということがあるように思うのですが、それも実に扇動的で、メディアをメディアする機関が必要となるかもしれません。でも、実際に私は、子どもたちの事件が起きるたびに、報道を見ていてひどいなと感じるのですが、それに対して何か一つ考え方を持たなければ

ばいけないと思っております。

それから、私は、大変失礼なのですが、この人こそ素晴らしい教育者ではないかという方にはあまりお目にかかったことはありません。実際に先生と呼ばれる方たちがいちばんお悩みになっているのではないかという感じがします。

私は相談室をやっている、子どもたちが月に10人ほどやってきます。びっくりしたのは、「先公」とか「男は」というので、誰のことかと思いましたが、自分の学校の先生だったのです。そこには親しみはあるけれども、全く尊敬はない。もっとびっくりしたのは、東京の場合、家が狭いこともあると思いますが、親のセックスを子どもたちはほとんど見ているのです。自分の誕生のもとになるものに対しての隠れた部分がほとんどない。

それから、インターネットを私は使っていますが、毎日人身売買よりひどい内容のメールが届くのです。これらを全部、今の子どもたちは目にしているわけで、その対応策も、先生と親、国と自治体と地域が一体となって考える必要があるのではと感じております。時代の進み方をキャッチする情報の、子どもへの対応についていけない教育者の悩みを実感するのですが。

米田

今日のテーマの「子どもの教育目標をどこに置くか」という、その教育というのは、先生方ご自身も悩んでおられるのではないかと思います。教育というのは何なのか。先ほど木村先生がおっしゃった、筋書きができているのを子どもたちにやらせる、それが教育なのか。それとも、筋書きも分からないことを先生と子どもと一緒に新しいものを見つけていくところに教育を求めるのか。将来研究するときには、やはり知識は持たないとできませんし、小・中学校のときにどのような教育が必要なのかということになると、私にもよく分かりません。今の決められたカリキュラムの中でどの程度のことができるのか、そのカリキュラムがいいのかどうか問題だろうと思いますし、非常に難しいところではないかと思っております。ただ、今の小・中・高校の教育を見ていると詰め込み教育しかないような気がしておりますが…。私はこのテーマをいただいて、一体何が教育なのかと随分悩みながら、今日、この場にきました。

木村

ありがとうございます。お話を伺っていて、本田宗一郎さんの話を思い出しました。ある本田さんが、画用紙を広げて松の木を描こうと思ったのです。あんなものは見なくても描けると思って描き出したら、枝振りがどうなっているか分からなくて、驚

いて自分の家の庭に飛び降りて、松を見ながら枝振りを写生したのです。それから後は、自分は分かっているとか、知っているとか、言わなくなったそうです。

日本の理科の教育で、枝振りまできちんと教えてくれているのでしょうか。ヨーロッパはきちっとやります。教会に書いてあるのです。人類の始祖・エッセイがいちばん下に横たわっていて、そこからずっと木が出ていて、いろいろなところにいろいろな人がいて、キリストとマリアが出てきて、それで今日の我々の子孫がいる。人類を樹木に例えた絵があって、学校の先生もしょっちゅう公園などに出て行って子どもたちにきちんと枝振りを写生させているのです。

日本の写生というのは、くしゃくしゃくしゃっと塗ってしまって、何がどう描いてあるのかよく分からないですよ。理科教育の基本は自然観察にあるのではないかと思います。そういうことをきちんとやっているのですかね。

米田

今、先生が外国ではきちんと教えているとおっしゃったのですが、教えるのではなくて、現場に連れて行って観察させると本当に伸びるのではないかと私は思います。

木村

美術館にもしょっちゅう連れて行きますね。

小林

私は今、広く一般の教育で、特に学校をよくくするということが非常に重要ではないかと思っています。家庭の教育機能が落ちてしまって、それを回復するには相当時間がかかるし、次世代育成からやっていけない限り直らない。ですから、現状を打破するためには、学校の機能を拡大して、家庭の落ちたところまでカバーするような学校にしてみたいと、私は特に政府にそう言いたいですね。

それには、子どもたちが学校に来て、生きる喜び、学ぶ喜び、あるいは遊ぶ喜びでいっぱいになれるような場として機能するようなデザインをしなければいけないのではないか。大体老人の人口と小児の人口とは同じだそうですが、国の予算は、子どもの5倍ぐらい老人にお金を使っているそうです。ですから、国がもう少し次世代のために何かをするという意味決定をしていただいて、ぜひ子どもたちにとって、家の中はつまらなくても、学校に行けば楽しいのだと、勉強ができるのだ、遊べるのだという世の中にしていだきたいというのが、私の小児科医としての願いです。

**木村** ありがとうございます。年寄りにいくら金をかけたって、結局死んでしまうのですからね(笑)。子どもはこれからですから、子どもにかけたほうがいい。効率性を考えても大事なことですよね。

私がお預かりしている大学は浜松にあるのですが、全身の映る鏡が45面つないであります。エレベーターの中にもあって、まず自分なりに身じまいをきちんとせよ、立ち居振る舞いを美しくせよ。そこでちゃんと笑顔を作る、あるいは態度で心を表現するということをやって、形をまず注意しているのです。ですから、出会えば必ずあいさつをします。学校教育の基本みたいなことを、今、大学でやっているのです。

これは評判がいいです。町の人との間のコミュニケーションは非常にうまくいっています。つまり、学校の中だけで純粹培養的に生きるのではなくて、世間様のどこでも通用するようなことを学校の中でやっているわけです。そういうところに努力とエネルギーとお金をかけるというのは大事なことです。あいさつは、今、小・中・高校でも始まっているようではあるのですが、全体にはっきり声を出すということが大事だと思います。

**佐藤** 今、小林先生がおっしゃったようなことは、最近文科省がやり始めていて、つい最近の生涯学習の会でも話題になりました。早寝、早起き、朝ごはんというのを文科省でやり出したのですね。朝ごはんは象徴的な意味だと思います。朝ごはんを食べているお子さんが成績とか、いろいろな意味でいいということで、広島県でも朝ごはん運動を始められたところなのですが、1年ぐらいでも少しいい方向の結果が出ているという話です。

たぶん、小林先生がおっしゃったように、今まで社会や家庭が子どもを育てるという機能を持っていたときは、そんなところまで学校がやる必要はなかったわけですが、時代が変わって、そういう機能がなくなったら、子どもたちのために何らかの形でそれを補うことをやっていかないといけないのではないかとすることは、私も非常に感じています。

これは今、研究テーマとして考えているのですが、いろいろなところに中間領域的な役割が必要ではないか。というのは、たとえばスクール・カウンセラーというもの、かつてはなかった仕組みだと思うのです。学校と子どもたちの間で、心の問題を含めて、中間領域的な保健室のような役割があったり、科学教育でも学校の先生と科学そのものの中に企業などが入って行って、インタープリテーション的なことや、現場でどう生きているかという生の情報を子どもたちに伝えに行ったり。かつては、

家にいたらお父さんが何かやっていて、そこに科学の材料があったと思うのです。それがなくなったときに、ただ知識として教えるだけではなくて、ものすごく意味があるのではないかと思います。

そう考えると学校は、今また安全の問題などがあって閉じる傾向にあるのですが、本来はいかに開いていくかというのがテーマだと思うのです。学校だけでできることは本当に限られているので、今の動きとしては情報開示なのですが、それだけではなく、いかに外の空気の中に入れて、子どもたちを元気づけるかということが大事になっています。

藤原和博さんという、リクルートから行かれて東京都の和田中学校の校長先生をやっていたらっしゃる方がいらして、その方は学校の中に地域を作るといって、地域本部を作っているのです。社会の中で活躍しているお年寄りや、仕事はしていないけれども能力のあるお母さんたちなどが、学校の仕事の中で活躍の場を持つのです。いろいろな能力のある人たちが学校に絡む。それは一過性のイベントではなくて、すごくいい関係性ができます。

昔は学校の前に必ず文房具屋さんやパン屋さんがあって、そういう人たちが中間的な領域として、何となく顔見知りの関係だとか、いろいろなところをつないでいたと思うのです。もう一度そういう仕組みを作っていきたいと、このままではどんどん離れていってしまう。それはかなり大胆な発想の転換で、非常に難しいこともあるけれど、次の子どもたちのことを考えたら、それをそろそろやらないと手遅れになってしまうのではないのでしょうか。

**木村** 学校の保健の先生なんていうのは、そういう社会的な感覚を持っているということで、子どもたちが来るのでしょうか。

**西館** 今、佐藤さんのお話を伺っていて、私は、女性の生き方もすごく難しくなったと思うのです。学校に任せられるといいことがいっぱいあると思うけれども、女性の方も働きたいし、また能力を持っている方がたくさんいることも事実です。逆に、母性として子どもを生んで育てたいという方もいらっしゃるのです。

だから、女性の生き方も今、岐路に立っている中で、学校の充実をと小林先生がおっしゃったことと同時に、私は母親教育をぜひやっていただきたいと思うのです。赤ちゃんの抱き方、おっぱいのあげ方、そういう基本的なことが全然分からないのです。赤ちゃんを腰から抱かずに荷物みたいに抱いて、下はぶらんぶらん、とか。あるいは、寝かせると上は天井だけだから、赤ちゃんは不

安ですよ。そこにお母さんがかぶさって抱っこしてあげるとかいうことを全然知らないのです。基本は父親が参加して両親がやればいいのだけれども、本当に親になる人にお免状制が欲しいくらい。家庭教育ではなくて、命に対する教え方が必要になってきたのではないかと感じています。

**木村** 本当にそうですよね。小林先生に伺いたいのですが、今、お母さんは子どもを保育所に預けて職場に行きますよね。子どもの立場から見ると、お母さんが次から次へと出てきて、本当にちゃんと子どもが育つのですかね。昔は一人のお母さんしか見なかったのが、今、極端な話、毎日人が変わるではないですか。あれはいいことなのでしょうが。

**小林** 問題はあと思うのですが、なかなか実証されていません。しかし、それをやったのがアメリカで、今から10年前に千何百人の生まれたばかりの赤ちゃんを登録して10年間くらい追いかけて、その間子育てをどのようにやったか、0歳保育をやったか、親が育てたか、お母さんは働きに出ていないか、父親が育てたか、そういうことを全部調べ上げた。そうしますと、いくつかのことが分かったわけです。

一つは、0歳児保育は、母親と子どもの関係がちゃんとしていて、保育園がそれなりにレベルが高く、保育士さんがちゃんと教育を受けて赤ちゃんの心を読み取る力があって、保育時間が著しく長くなければ、問題ないということが証明されました。父親が子育てしても問題はない。ただし、夫婦が仲よくなければだめ(笑)。みんな当然の答えなのですけれども、それを科学的に実証したのです。

日本の0歳児保育も、もうちょっとちゃんとできればいいのですが。日本は保育時間が長すぎるということがあります。それから、保育士の教育レベルがまだ十分ではない。少なくとも看護師さんと同じぐらいの教育をしなければいけないのではないかと我々は考えております。そういうデータがどんどん出てきていますから、政府も一応は考えているのだと思うのですが、実施するにはお金がかかるとか、いろいろな問題があって遅れていると思います。アメリカはそういう問題にすぐに手を付けて、千何百人ですけれども、それを追いかけたということは素晴らしいことだと思うのです。

また、アメリカのデータでは、保育士さんの数が多いこともいけない。子どもにとっては本当のお母さんと保育園のお母さんぐらい、せいぜい3人ぐらいまでがいい。考えてみますと、昔は大家族の中でお母さんを中心

にして、おばあちゃん、おじいちゃん、さらには隣のおばさんまで、みんなグループで子育てをやっていたわけです。母親に準ずる人が2~3人ぐらいまでは、優しい子育てをする人だったら、そんなに問題ないと思います。

「三つ子の魂百まで」という、3歳ぐらいまでの子育てが子どもの一生に影響するという格言を世界で集めた人がいます。100近く集めた中に、「母親」は一言も出てこない。粉ミルクはありませんから、母親が育てたに決まっているからです。けれども、みんなが助け合って、大家族の中で、あるいは向こう三軒両隣の助け合いの中で子育てをしたのだらうと、私は理解しています。ですから、21世紀の我が国においても、そういうグループで子育てをするという発想を持たないといけないのではないかと、私は個人的に思って、機会あるごとに発言しています。

**木村** そのグループがお互いに仲がいいということですね。単なる保育所ではないのですよね。大事なことです。愛情というのが基本にあると。ありがとうございました。

**佐藤** 私も子ども二人を保育所に預けて育ててきたのですが、そのときに思ったのは、保育所で子どもたちが育つときは、グループという感覚があって、入れ代わり立ち代わりいろいろな子が入るような一時保育と、定常的な保育を一緒にするのはちょっと問題だなということです。また、ベビーシッターはなかなか頼めなくて、二次保育などは知り合いをいろいろ頼んで、同じ人をずっとお願いしていました。子どもはすごく人見知りをして、不安定になるので、できるだけ安定した状態で育てるということは考えていました。

あまりにも保育ニーズのほうだけにとらわれてしまうと、それこそ長時間保育になってしまいますし、信頼関係、子どもたちのグループというも育成されませんから、そこは真剣に考えていかないと、お母さんの権利だけでは済まない問題はあると思います。

でも、共働きすると、父親の育児参加がどうしても必然的に増えますので、そういう意味では子育てを両方でやるという形がよかったですし、また、人にいっぱい助けをもらうというのも、子どもにとってもいろいろな大人の人に出会うきっかけにもなっていますし、いい面もあるのではないかと思います。

**米田** 少子化ということで、これからの富山を考えると、せめて富山に生まれた人間は富山に帰ってもらいたい。大人になってから、富山でこういう職



があるから帰ってこいと一生懸命言ってもなかなか難しいので、先ほどから話にある親と子の絆が小さいときにDNAにインプットされていれば、自然にふるさとを愛する気持ち、親を愛する気持ち、育ててくれたグループの人たちを愛する気持ちで、自然に富山に帰ってくれるのではないかと思います。ですから、そういう広い意味での教育が、非常に大事だと私は思います。

**西 舘** 富山は三世代世帯が多いのですよね。だから、お嫁さんが働きに出てもいい。家の広さや、各人の役割がしっかりしている、いちばん住みやすい県と伺っています。

東京では保育園に行かせるのが当たり前で、その中に教育熱心な保育士さんがいるのです。熱心のあまり、音楽や演劇に取り組むという方もいますが、得意でない子には苦痛以外のなにものでもない。自己教育法の弊害も考えてほしいと思います。

また、ある幼稚園を訪ねたときに、私はびっくりしたのですが、昼寝を否応なくさせるのです。何で寝かしているのですかと聞いたら、鳥の声だということです。鳥の声で目覚めるのは聞いたことがあるけれども、鳥の声で寝かすというのはすごいなと思っていたら、その子が大きくなって、鳥はレコードから流れてくるものだと思っているということがあって、幼稚園も自然を取り入れるということも、もうちょっと考えてほしいなと感じました。鳥は朝の感じだと思うのですが、鳥で寝かせる、しかも同じ鳥が毎日電気仕掛けで出てくるというのは、子どもにとって決していいことではないと思います。

**佐 藤** これはつい最近、ベネッセさんが出されたものですが、幼児の習い事がすごく多くなっている、子どもが少なくなっている、それこそ先ほどの話ではありませんが、子どもの意思を尊重せずに親の意思で習い事をしているという例がたくさんあるようです。1歳児で25.1%、3歳で50.9%、6歳だったら85.5%、それが習い事の開始年齢ということです。ですから、たぶん、先ほどの演劇が嫌いになるではないですが、本当に自分が要求する前にいろいろなものが、もういらぬというくらい与えられる社会になっています。それは、小さいときから教育したら成果が上がるといった情報が入っていて、子どもの教育がお母さんの成績になって、それが遅れているかどうかというようになっているのではないのでしょうか。

そういう意味では、子どもの時間というのがあるはずなのに、それを全部大人のカリキュラムの感覚で教えているというところが、いろいろなところで問題になって

きているのです。でも、親は、特に母親が熱心だと思っておりますが、情報がない中で一生懸命になってしまっているのだと思うので、もう少し世の中全体の中で子育てをすることをしないと、どんどんそうになってしまうのではないかと、危惧を感じます。

**西 舘** 発表会などは、教える先生のための発表会であって、子どもはちっとも楽しくないというのを時々目にします。

**木 村** 今の親はどうしてそんなに演劇をさせたいのですか。

**佐 藤** 演劇はコミュニケーション能力が豊かになると、ワークショップで言われていますよね。

**西 舘** 卒園式などは必ず歌や演劇をやりますね。そうすると、何か役を与えるわけで、それ自体はとていいことだと思うのですが、中にはそういうことが嫌いな子もいるのです。そういう子に無理してやらせると、こんな難しいことをよくやっただと、親は感激して泣くのです。でも、子どもにとっては一生嫌いになるということもあります。それで個性が削がれては困るということはありません。

私にも孫がおりますが、五つぐらい習い事をしていません。それで、何も身につけておりません(笑)。やらせているだけです。

**木 村** 足利市の郊外で、こころみ学園というのがあります。知的障害の子を預かっていて、山林を改造してブドウ園にしているのです。今、ココ・ファームという名前でワインも売っています。最初は子どもたちに山林を耕させるということで、強制労働をさせているのではないかと親が猛然と反対したらしいのです。ところが、やっていくうちに、今まで垂れ流しだった子どもたちがちゃんとトイレで始末するようになって、成長していく。親がそれを見て、今度は賛成の急先鋒になった。今では働いている生徒がいます。

農業というのは感性を育てるうえでも、自然に対して美しいという感動を経験させるうえでも、あるいはクリエイティブな能力を発揮するうえでも、非常に大事ではないか。最近、文部科学省も学校農園をやりなさいと重視するようになったという事実があります。とげが刺さったり、ハチに刺されたり、いろいろなことがあると思いますが、でもその中で感性が磨かれていくのではないかと思います。学校の授業時間とは全く違うけれども、

そういうことのほうが本当に大事なのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

**西 館** ありますね。いいことばかりではなく負の部分がありますが、負というのは文化にとっても大事だと思います。遊びとて、危険、冒険は伴います。負を子どもに教えておく教育はとても大事なのではないかと感じます。

だから、学校の先生も、大学を出てすぐ教育者になる以前に、ある程度社会を見てから子どもたちと接するような制度が必要なのではないかというのを感じます。

**木 村** 最近、機械の技術が進んできています。私はカメラが好きなのですが、昔のカメラマン、土門拳や木村伊兵衛は、大したカメラは持っていないくて、今のカメラほど進んでいなかったにもかかわらず、迫力があったり、非常に心を揺るがすような仏像やお寺を撮ったり、庶民の生活を撮ったりしているのです。機械が進めば進むほど人間の感性はだめになるのではないかと。僕自身も、昔は28mmのレンズや105mmの望遠を付け替えながら撮っていたわけです。いつも一人なものだから、ヨーロッパで、雨で片手に傘を差しながら、片手でレンズ交換をするなんていうのは至難の業で、泣きたくてしまうのだけれども（笑）。対象物に近寄ったり、遠く離れたり、足で稼いだときのほうがいい写真ができています。今、ズームレンズでキュキュッとやると、迫力のある写真が撮れないのです。機械が発達したりすると感性は鈍ってしまうのではないかと思うのですが、どうですか。

**西 館** そうですね。ただ、だからといって、それをなくすというわけにいかないの、テレビにしても電話にしても自動車にしても、確かによくない部分もあるけれども、なくせない。ではどのようにそれを使うかという次の世紀に入ってしまったかなという感じがします。

**木 村** 毎年11月に、現代の名工が150人厚生労働省から表彰されます。昭和42年からずっとやっていることなのですが、今年も11月9日に、明治記念館で150人、一人ひとり表彰されました。その人たちは1000分の1ミリを感じ取れるのです。レンズ磨きでも塗装でも。それから、和紙を使って仏像を包装するときでも、手袋は絶対に使いません。自分の手で、素手で包装するのです。こういった鋭い手の感覚が、物を考えるより基本的に大事なのではないか。映像だけではうまくい

かないのではないかと思うのです。ああいう手の教育は機械がいくら進んでも、一方ではなくしてはいけないのではないかと思うのです。

**西 館** 手づくりのものの教育はとても大事になっていきますね。

**佐 藤** 案外、若い人はそういうことが分かっていて、先ほどサラリーマンになりたくないと言いましたが、職人さんなどに対するあこがれはすごくあるのです。実際になった人もいます。今は、大学を出てから違うこと、「手に職」的なことをやるとか、ケーキ職人になったり、漁師になったり、それがいちばん成長実感に結びつくことだと思うのです。私たちはどちらかという合理化して、そういうことはあまりやりたくないと思っていましたが、今の若い人たちには大学を出るとまた違う価値がそこにあると思っている人も、出てきているのではないかと思います。

だけど職人になってその人たちは食べていけるのか。好きなことをやりたくて職人になったり、アーティストになったり、演劇をやったりするのだけれども、それでは食べていけない。結果としてはフリーターみたいな人もたくさんいるので、社会全体というか、お金を持っている大人としては、そういう人たちにいかにお金を出すか。せっかく伝統職人的なことをやって作ったものをどう買ってあげるかを考えていかないと。経済の循環の中に若い人を入れていくことがすごく大事だと思うのです。

今はどうしても教育というところで切り離して考えていて、先ほどの赤ちゃんの話などでも、アメリカやヨーロッパでは、ベビーシッターという仕組みは、単に親が自由になるという部分もありますが、結果的には、子どもたちが赤ちゃんの面倒をみてお金をもらえるという一つの循環の中に入っているわけです。それは自分が、何かそのためにできるということになるし、社会体験というのはそういうことなのだと思うのです。

それを今は切り離して、アルバイトは全部禁止しておいて、急に職業訓練をやるのですが、それも少し戻していくことを考えないと、子どもたちには大人の勝手なありようで世の中が動いているように見えるのではないかという感じがしています。「14歳の挑戦」をやっているのはとてもいいと思います。大学になってインターシップをやっても、単なるお見合いにすぎないのです。若い人たちが本当に力を持とうと思えば、起業家のところに行くとか、何かのプロジェクトにかかわるとか、しんどいものをするところに乗せてあげないと、安全なレールの上にポイと乗って、きれいなまま「はい、

上がり」という体験がまだまだ多いのではないかと思います。その辺を、これから真剣に大人が考えていかないと、いろいろなことをやっても、それが成長になかなか結びつかないのではないかと思います。

**木村** 企業の中でも、企業間でも、プロジェクトチームを作って、販売部門と製造部門、営業などが一緒になって研究開発するとかやっていますよね。ああいうのは、それぞれの能力を引き出すために、大事な教育の機会ではあると思います。

**西舘** 私は、生活の流儀を変えないと、日本の方たちは都市に行ってしまうと地方はますます過疎になっていくと思います。これだけ高度成長してお金を持っているのに、海外旅行をするとき、私たちは日本人として尊敬すらされないというのが実感です。

何だろうと思っているのですが、もし抜本的に教育にあるとすると、先ほどおっしゃったように、本当はふるさとに帰って食べていく仕事があればいいけれども、ふるさとに帰っても食べられない。だから、職なら何でもある東京に行こうとなる。基本的には、今、世代の中で生活の流儀を変えないとだめだと思います。そのためには、基本を自給自足できるところまで持ってこないとだめだと思います。

帰省ラッシュが間もなく始まります。でも、あの時期の列車の料金がいちばん高いのです。本来なら、そういうときこそ安くすれば、みんな分散して家族で帰れるのに、帰れないから車に全部乗っていかうとして、結局、事故が起きるということになる。

一つ一つをよく検討してみると、ふるさとにもう一度心を戻すやり方はいくらでもあるのではないか。これから、そうしないと心は育たないと私は思います。

**木村** そうですね。セカンドハウスを田舎に持つ人も少しずつ出てきてはいますが。

**西舘** 日本の場合、セカンドハウスは無駄ではないでしょうか。生活に移すだけで、何一つ変わらない。

**木村** いや、すみません(笑)。ただ、日本から海外へ行って尊敬されないというお話でしたが、日本文化で他の国にないものに折り紙があります。ドイツ人のじいちゃん、ばあちゃんと孫がレストランで食事をしていて、ある人が相席になって、その孫のために鶴を折ってやったら、相手のドイツ

人のじいちゃん、ばあちゃんが驚嘆して、孫のために、この鶴をくれないかと。ついでに折り方を教えてくれないか、今晚のごはんは全部私のほうで持つからと(笑)。日本文化が大いにプラスになったという話もあります。折り紙は学校で教えているようすからね。

**西舘** 教えています。新潟の地震のとき、体育館で子どもたちが泣いているときに、おばあちゃんがお手玉やあやとりを教えてあげて、子どもがとても安心したというのを、この間聞いてきましたから、それは日本の素晴らしい文化だと思います。

**木村** ああいうときは昔からあるものが安心ですね。おにぎりの炊き出しをやるのも、そのせいですかね。パンなどを配られるよりは安心なのですよ。

**米田** 話がちょっと変わるのですが、これは学校での教育ではなくて、家庭教育の話になると思うのですが、うちの会社で採用しても、たとえば朝、初めて会っても「おはよう」というようなあいさつができないのが随分いるのです。これは家庭教育だろうと思います。朝、会ったときに、気持ちよく「おはよう」と大きな声で言える人間になってもらわなければ困ると思うのですが、中には言えないのがありますね。

それから、先ほど佐藤さんが無気力サラリーマンとおっしゃいましたが、忍耐力がないのが見受けられます。仕事をやっていけば面白くなるし、面白ければ仕事も見つかるだろうという、そこまでいかないのです。そういうのは学校の勉強というよりは家庭での勉強、教育ではないかと思います。ですから、むしろ子どもを教育するというよりも、その親を教育しなければいけないのではないかという気持ちを、私はいつも持っています。それから、親が子どもを叱らなくなりましたね。

**佐藤** 本当に親子のことが非常に難しく、これからますますそうなるのではないかと思うのです。次世代研究所となって始めたところですけども、家族の中に世代間ギャップがあるというのを前提で考えていたのですが、最近調べるとそれはなくなったのではないか。平成ニューファミリーなんて言い方をしますが、平成になってから結婚して子どもを生んだ家族は、子どもが小・中学生ぐらいになっているのですが、家庭の中で非常に仲よし親子になっていて、趣味とか、ほとんど一緒のような感じなのです。ですから、家庭教育というのは本当に難しくなって、先ほど申し上げたように学校とか、違う場所でやっていかないと、なかなかうまく回

っていかないのではないかと感じております。

そういう意味では、先ほど別荘の話が出ましたが、イタリアなどのセカンドハウスのありようを聞いていましたら、日本では普通の便利さを田舎に持っていきただけですが、そうではなく、非常に不便な状況を作っているのです。電気、水がないということを平気でやっている。人間が本来持っている、生きるという喜びを教える場だということです。だから、1か月も2か月も夏休みをそこで過ごします。日本の場合は1週間ですから、旅行に行き終わります。

家族の文化を伝承するような時間が、日本の家庭の中にはほとんどないのではないかと。普段の日常では難しい部分がありますから、場所を変えてきちっとやっていく、その中に仕組みられているのではないかと。でも、日本というのは野放図に豊かさを享受していて、そこを考へるのを今ごろから始めているところがあるのかなと。

それがあまりひどくなるとまた揺り戻しがあって、今の学校でいろいろなことをやるようになったように、家庭教育もまた少しい方に行く可能性もあるのですが、先ほど言った、ギャップのない家族の中で、平和が良かったときに、非常に家族がばらばらになり始めていますので、それを何かつなぎ止めるものが考えられないと難しい状況になってきています。

海外は、結婚の制度がかなり難しくはなっているのですが、家族は厳然としてあるのです。籍は入れていなくても、別にシングルマザーではないのです。ちゃんと一緒に住んで家族をやっている、子どもがいる。ですから、その辺はぱっと入ってきて、子どもが増えれば良いというような話にならないようにきちっとしていかないと、一部には結婚しなくても子どもができればいいのではないかと。そのような話もありますよね。家族というものをもう一回考え直す、すごく大事な時期に来ていると思うのです。

木村

ヨーロッパでは、夫婦であれ、親子であれ、いつも一緒にいるわけです。フランスだと社会的には36歳までは未成年。毎週土日になると必ず親元に帰らなければいけない。だから、主婦は土日は忙しいのです。子どもは帰ってくるわ、おじさん、おばさん、甥ごさんが帰ってくるとか、週に1回はわいわいやっているのです。家族はいつも一緒にいるべきものだという基本的な考えがあって、これが大事なのです。ばらばらになりきると、心もばらばらになりますから。だから、亭主がどこかに旅をすれば奥さんもついていく。実は生活を共にしているという、それが合法であれ、非合法で

あれ、それが家族だという気持ちがとても強いのです。

私が南フランスのエクサンプロヴァンスに行ったとき、土日になりますと、学生が全部寮から自分の家に帰ってしまうのです。帰らないのは2階にいるアフリカ人と1階の私だけです。2階のアフリカ人は退屈だから、ボンゴボンゴ太鼓をたたき出すのです。これが非常にわびしい悲しい太鼓になってしまったのですけれど。

普通、家族というのは、毎日とはいかないけれども、必ず普段は一緒にいる。普通、イースター、復活祭のときにはフランス中から人が帰ってくるものですから、翌日の月曜日は正式に休みで、日曜日が復活祭ですが、そこからまた自分の勤め先に帰っていくのです。3月の末から4月の末の間に毎年移動します。車ではまだちょっと雪が降ったりして危険なところがあるので、汽車で人が移動しますが、月曜日は自分の住まい、職場に帰る人で列車がいっぱいになってしまいます。あのよう、一緒にいるための日というシステムを、日本でも作る必要があるのではないかと思います。ばらばらになったらもうそれきり家族ではない。遺産相続の場合でも、昔はばらばらになったら遺産を相続する権利がないことになっていました。今、そうではありませんからね。

先ほど日本の美しさという話をしましたが、日本の美しさがどこに出ているかという工芸の世界だと思います。絵や音楽よりも、実用と結びついた工芸の世界。だから、これから後は、世界に向けて、富山なら「富山クラシックス」というものを作って、富山の工芸品を、お土産としても極上のものを世界に出していく。そのための学校教育とか、あるいは家業として、昔わらじを作ったように、手の技が富山で伝統的に出てくると、産業の振興にもなるし、教育のためにもいいのではないかと思います。そういうものを学校で教えてもらえませんか。それぞれの学校ごとに目玉の工芸を一つ置いて、みんながそれに親しむようにする。同時に、富山の産業としても、極上品を「富山クラシックス」という形で漆器であれ、彫金であれ、何であれ、芸を極めていくと、まさにそれが日本の美意識を育てるいい教育になるのではないかと思います。

これはまさに日本の手の技です。いくら中国やインドから新しい産業の攻撃を受けても、最後に残るのは手の技の素晴らしさで、これだけは世界のどこにも負けないものがあると思います。だから、そういうのを学校教育で極めていってほしいと思います。

生徒も、本物をやればついてくるのではないですか。地元にとってもいいし、あるいはこれがお小遣い稼ぎになる。フィンランドでは、そういう工芸の大学があって、卒業作品は最後に売り払ってしまう。大学をエクスポジ

ションの会場にして売っているわけです。一方で、芸を極めるのもいいし、他方で廉価版を作っていくということがあるでしょう。

その意味で、日本の箸などは、今、世界的に広まりつつあります。フランスのボルドー美術館に附属のレストランには、ちゃんと日本の箸が置いてあります。箸で食べると柔らかみがあって、手と一緒に感じがあって、ナイフやフォークよりもいいというので、日本人の若い人よりもうまい箸遣いをするフランス人が最近出てきています。日本人のために置いてあるのではないのです。土地の人がだんだん日本の食文化と箸のようなものになじみ出しています。第二の食革命が日本から起こってきたのです。

箸一つだっていいのです。ああいうものをこれから特技として学校で目玉にしてもらえれば。また、大学受験も考えなければいけませんね。ペーパーテストだけという時代ではないと思います。そういうのが自然科学の創造的な能力に伝わっていくのではないのでしょうか。そうではないですかね、手の感性だとか、そういうものに目覚めていくというのは。

小林

そうだと思いますよ。指を動かす皮膚の感覚というのは非常に重要な機能を持っていると思います。それは我々の行動を見てもそうですし、皮膚の感覚を授受するところは脳で相当広い部分があり、しかも生まれたときからかなり発達しているのです。そういうことから考えても、意味があるのではないかと思います。

今の話で考えさせていただくと、芸術教育ですね。小・中・高等学校というそれぞれのレベルで、日本では音楽は非常に発達して成果を上げたと思いますが、絵画や工芸は遅れているのではないかと思います。ですから、そういう芸術教育の幅を広げて、多様なものを子どもたちに選ばせてやらせる場を持つことは非常に重要ではないかと思います。

本当かどうか知りませんが、ドイツは芸術関係の予算を減らさなかったそうです。なぜかという、芸術と犯罪は関係があるというのです。つまり、芸術の予算を減らして、社会における芸術活動が低下すると犯罪が増えると。私は何か関係があるような気がします。

木村

20世紀初め、パデレフスキというポーランドの優れたピアニストがいました。世界的に有名なピアニストですが、第二次世界大戦が終わってすぐにポーランドに革命が起こって彼が首相になるのです。ある日、フランスの外務大臣のクレマンソーとパデレフ

スキが会おうわけです。クレマンソーがパデレフスキに尋ねます。「あなたが有名なピアニストのパデレフスキさんですか」「はい、そうです」「そして、今は首相」「はい、そうです」「おお、なんと悲惨な」と言ったということです(笑)。芸術家のほうが上なのです。

犯罪とどういう関係があるか分かりませんが、でも、やっぱりあるでしょうね。フランスの犯罪というのはそういう犯罪が多いということがあります。車を盗まれて、ある日その車が返ってくる。「あのとき、私は急いでおりまして、やむを得ず無断で借用いたしました。大変失礼いたしました」と。おわびのしるしにというので、オペラの特等席の切符が2枚来るのです。それで、夫婦で喜んでオペラに行って帰ってみると家の中には何もありません(笑)。全部持って行ってしまった。芸術的な盗み方をするのです。

小林

犯罪の予備軍には精神的な問題があります。海外では特にそうだと思いますが、そういう人たちの発散する場、キレルのを抑える役割と僕は考えて理解しました。

木村

本当にそうですね。特に歌うなんていいですね。

西館

いいですね。本当は富山に人づくり子ども大学が何かをお作りになっていただければ。本来ならば一つ一つの分野が全部人づくりでない。柳宗悦さんではないけれども、江戸時代から急速明治といってもない時代になって、いい匠がみんななくなってしまった。江戸の下町、あるいは地方にしか残っていない、そういった技術を集める。

あるいは先ほどこちらに来るとき、小林先生が「国に子ども家庭省というのが必要ではないか」というお話をなさっていたのですが、それぐらい画期的なことを発信しない限り、右往左往して終わってしまうのではないかと思います。

木村

子ども大学とはどういう中身なのですか？子どもが入るのですか？

西館

いえ、そうではないです。一つずつ、先ほどおっしゃった理科もそうですし、あるいは先生がおっしゃった子どもの問題の、子ども家庭省なんていう役所とも密接にして作らなければいけないと思うし、あるいは匠を育てていくことでもあってもいいし、実際に歌でも、私たちの子守唄をはじめ唱歌、童謡、そ

うものを一括したところがないのです。全部分散型になっているのを、あるところできちんと残しておかないといけいないのではないかというのを感じます。

**木村** なるほど、それは小林先生の、心の世界での成育病院、大学みたいなもの。

**西館** そうです。

**小林** 子どものことを体系的に勉強するところ、教育学、心理学、小児科学などはそれぞれある局面だけを見てやっているのです。そうではなくて、その全体の社会的側面も生物学的側面も合わせてとらえて勉強するような大学で、そこで1年間勉強してから保育の学校に行くとか、そのようにすれば非常にいい。行政官も、福祉や子どもを担当する人は1年間そこで勉強できなさいと。それから仕事をする。

**西館** そういふところの前駆として必要なのではないかと思います。

**木村** 要するに、子ども学についての大学ですね。

**西館** そうです。そんなのがあったらいいですね。

**木村** それは大事ですね。いいですね。富山から作ったらどうですか。

**小林** 今、日本に「子ども学」という名前をつけた大学が10以上あります。中には保育をそのまま子ども学にしたところもあるし、また、今申し上げたような子どもの問題を広く考えられるような勉強をして、そのうえに教育・保育や何かを勉強して資格を取るといふような発想で動いているところもあります。だから、ないことはないのです。

ただ今、少子化対策担当大臣はりっぱな女性がなりましたが、もっと広く、子ども家庭省ぐらい作ったほうがいいと思います。ノルウェーがそうです。

今、予算が少なくなっているのは、文部科学省と厚生労働省が取りっこをやっているわけでしょう。それで、なるべく金のかかる計画を出さない限り、予算が入ってこないのです。ハードだけではなくて、ソフトなことに使えばもっとハードの効果が上がるわけです。児童手当を出すとか、保育園を作るとかいうことも必要ですが、社会全体を優しくして、老人や子どもばかりでなく、女性が生きがいを持つことができるような場を作るとい

発想も組まないといけいない。だとすると、極めて高度な政治的ならびに行政的なものになるわけです。21世紀の日本を担う重要なことですから、そういうものをこの際思い切って作ってやっていただきたいと、私は思っています。

**木村** 本当にそうですね。今、大変いい結論が出ましたが。

**佐藤** 最後にちょっと。せっかくいい時代が来たので、大人が子どものことをもっと信頼するようなことができないか。先ほどの芸術の話ですが、受け手だけではなく、担い手をどう作っていくかということ。行政や企業がメセナをしるとよくいわれるのですが、与えられる状態というのは、必ずしも人間の力を出すことにはなりません。若い人たち自身が何かをするということに対してサポート役に回るといふことが、大人の世代にとってはすごく大事です。逆にそれは、私を含めて大人自身が人生をもっと楽しむ、豊かにするということ。そうすると、大人になりたくないと言っている子どもたちも、あんなに楽しいのだったらいいなと思うわけですから、そういったお金を払えば、経済的にもうまく回るというような大きな流れの中で考えていく。対症療法で何かをしてあげようということではなくて、むしろ基本的なところで、まず子どもたちの力を信じるということから、そういう流れが始まるのではないかと思っております。

**木村** ありがとうございます。米田さん。

**米田** 先ほど先生がフランスでは36歳まで社会人ではなくて、子どもだとおっしゃいましたが、私も最近、町で子どもを見かけると、自分の老後はこの人たちにお世話になるのだなという気持ちで見えています(笑)

私どもは、今、佐藤さんがおっしゃったように、子どもも含めて、若い人にやらせればできるのではないかと思っているのです。だから、思い切って国会議員を36歳で定年にしてしまおうとか、そういう思い切ったことをやってもいいのではないかと。意外とあの杉村太蔵さんあたりが活躍してくれればできるのではないかと期待しています。

ただ、私も先ほどおっしゃったシステムは非常に面白いなと考えております。老人から見ると、子どもは何となく危なっかしいなと思います。でも、やらせれば意外にできるのではないかと期待を私はいつも持ってお

ります。

**木村** ありがとうございます。今日は、これからの教育をどう考えればいいのかというテーマで意見交換をしましたが、今、国家も企業もはっきりした目標を定めきれない。21世紀がどうなるかがはっきりしません。かつての日本の、子どもが天皇の赤子ということはもちろんそうではなく、その反動として子どもは親のペットであるというのが、今はびこっていると思います。どっちも正しくなく、未来からの預かり物です。今のようないまぬ時代こそ、子どもの教育について真剣に考えなければいけないと思っております。

どのような新しい生き方、新しい価値観の転換が起こっても、それに耐えてたくましくやっていけるような体と心、理性と感性、両方を育てなければいけない時代ですから、最後に出てまいりました子ども学についての教育を国家的な規模でこれから考えるべきではないか。あるいは感性と認識と、うまく結びついた形での工芸などを中心とした学校教育の強化も大事ではないか。あるいは、西舘さんが最初におっしゃった、声を通して人と人とが結び合える、そしてまた、人と地域、その歴史や文化が結び合える、先祖とともに生きていくという郷土愛を育てていくことが大事である。その中で挫折や失敗も、これからの教育にとって不可欠であるということ、あるいは礼儀作法をきちんと教え込む。さまざまな大きな問題が出てきました。大変に活気のあるいいご提言をいただいたと存じます。

理事長さん、一言いかがですか。

**中沖** 今日は木村先生の適切なご指導のもと、各先生方から積極的なご意見をいただきました。ありがとうございます。

実はいろいろ聞きたい事項があるのですが、小林先生には、子どもたちが腹の中に入っていてどのように大きくなっていくのか、そして将来、我々日本国民として子どもを育てるためには、何にいちばん力を入れていけばいいか。いろいろな意見があると思いますが、何にいちばん力を入れなければいけないのかをお聞かせいただくと大変ありがたいです。

それから、佐藤先生には、子どもを取り巻く社会ということではいろいろなことを取り上げておられるのですが、今、先生が子どもたちにとってこれがいちばん大事だ、これを学校でやってくれと考えておられることを、簡単にお話ししていただきたいと思っております。

今、特に学校の先生方もお聞きしたいのは、子どもたちの育て方と今後の伸ばし方です。その問題と学校教育

のいちばんの問題点を、これからの富山県の場合、どう考えたらいいかということをお教えいただけますと、大変ありがたいです。

**小林** 私は、子どもというのは生まれながらにしてお父さんとお母さんの遺伝子で作られた基本的なプログラムを持っているように思うのです。胎児を見ても新生児を見ても、やることはほとんど我々がやることをやっているのですから、そういうものを持っているのです。ただ、その基本的なプログラムをうまく組み合わせ、一般社会で生活していけるような能力に育て上げていくのが、広い意味の教育であろうと思っております。

年齢的には、乳幼児期の育児、幼児期の保育、学校に入ってからからの教育の三つに大きく分けられると思っております。生物学的な存在としての子どもを教育するには、言葉ができる・できない、あるいは歩き始めるときが一つの大きな転機だそうなんです。ですから、そこまでは感性の情報というか、優しさによって子どもを育て、基本的信頼を作り、言葉ができて物事をロジカルに考えられるようになってから、たとえば日々のやり取りの中で他人の心を読み取る力を獲得することが、私は学校教育に入る前に重要なのではないかと思います。

他人の心を読み取る力を持つということ。「心の理論」と最近の心理学では言いますが、そういうことをちゃんとマスターしなければいけないのではないかと。子どもたちは自分の親からもらったプログラムを働かせながら組み合わせていますから、言葉が出たあとも、優しさに支えられない限り、そのプログラムがうまく動かないことがあると思っております。ですから、それはずっと重要なことになると思っております。今後は、人間の持っている教育の能力、子どもたちに広い意味での文化を伝承する学校教育の意味が非常に重要になってくるように、私は思っております。

ただ、小児科医として育児や保育や教育に関心がありますが、実際に教育現場に立ったことがなく、医学部の学生以外に教えたことがないものですから、分かりません。しかし、ぜひ先生方へお願いしたいのは、子どもたちへの優しい眼差しを持って子どもたちと対応しながら、教育学で勉強された教育の理論や技術をうまく動かして、子どもたちの心と体のプログラムがフル回転するような、楽しく勉強するようにしていただきたい。赤ちゃんは、遊びながら学んでいくわけですから、学びと遊びをどうやって組み合わせさせて勉強を楽しくするかという技術も、ぜひ考えていただきたいと思っております。

佐藤 私は教育者ではないので、たいしたことは言えないのですが。

今の学校に来ている子どもたちは、経済的にはかなり似通っているのかもしれませんが、いろいろな事情を抱えて生きています。そして、親の世代が育った時代と大きく違っています。しかし、教育現場では従来型の目標設定や価値観などがまだまだ残っていると思います。それが子どもたちにすごく違和感になっている部分があるのではないのでしょうか。

先ほど仕事の話で少し申し上げましたが、子どもたちにとって本当に学ぶというのはどういう意味があるのかということ、先生とちゃんと議論できているのだろうか。当然やるべきものとして与えられる状況になっているのではないか。そういう非常に基本的なところに、今の人たちは悩みを持っているので、そこをきちっと解決してあげないと、次のステップが踏めないのだと思います。

不登校の人の話を聞いていると、学校を拒否しているのではなくて、すごく悩んでいる。社会と自分との接点が見つからずに、すごく早い時期に悩み始めてしまった、という状況もよく見受けられますので、この大きな変化を学校現場がきちっと受け止めて、そのうえで教育をどうしようかということを考えないと、今までどおりでやるのは非常に難しい。

子どもたちはなぜ学ぶかということから悩んでしまっている、そこに対する答えをあげるということで、当然だと思えることをひもといていって、大人も一緒に学ぶ。大人にとっても、全く目標がなく学ぶのは実は初めて来た道だと思います。ですから、一緒に学ぶという部分も当然出てくるのではないのでしょうか。

今の学校は非常にドライというか、昔のほうが一人一人のところに入っていきようなところがあったのですが、今、そういうのは見受けられないです。それは一人の先生では無理なのかもしれないですが、一人ひとりの事情や社会の変化というものに、どれだけ先生方が寄り添っていきことができるかということが、子どもたちの信頼を得るためにはすごく大事なことなのではないのでしょうか。

それは、実は会社も一緒に、上司というだけでは誰も言うことなんて聞きません。きっちり考えていて実行できると評価してくれて、初めて人は動くのです。そういう意味では、今までのような垂直型の人間関係ではなくて、フラットな人間関係の中で人をリードするというのはどういうことかということも、つながっているのではないかと思います。

もう一つは、先生と保護者の信頼関係が今、怪しくな

っています。びっくりするのですが、学校現場の先生と話したら、保護者からクレームが来るということです。クレームというのはすごい言い方だなと思いました。保護者のほうも学校に対してそういう感覚で見ているのですよね。ここに信頼関係が全くないので、もうちょっと近づくこと。それをちゃんと作らないと生徒との関係がうまくいかない。

それは先ほど申し上げたように、学校を開いていくことでお互いに行えることを持ち寄る関係みたいなものをまず作らないと、信頼は生まれないだろうと。PTAの人は何か学校ができないことをやってくれるような、頼んだことをやってくれるような存在ではなくて、彼らにはちゃんとできることが最初からあって、それをどのように学校の現場が受け入れていくかという話からスタートしないと、うまくいかないのではないかと思います。

木村

では、今日はこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

中沖

どうもありがとうございました。



# 「立山倶楽部」 会議テーマ

	実施時期	実施場所	テ　ー　マ
第1回	平成6年6月18・19日	立山高原ホテル	とやまから21世紀
	木村尚三郎、伊勢彦信、大浦 溥、黒木靖夫、今野由梨、鈴木忠志 佃 一輝、山本卓真		
第2回	平成7年7月25・26日	宇奈月国際会館	とやまから21世紀 ～とやまから世界へ～
	木村尚三郎、伊勢彦信、大河原愛子、楠田 實、高坂正堯、今野由梨 東郷茂彦、中條高德、山本卓真		
第3回	平成8年10月3・4日	立山高原ホテル	とやまから21世紀 ～ゆとりと豊かさの質を問う～
	木村尚三郎、伊勢彦信、今野由梨、丸田頼一、森下慶子、山本卓真 湯川れい子、吉岡 明、吉田光男		
第4回	平成9年10月1・2日	立山高原ホテル	とやまから21世紀 ～文化と交流の時代へ～
	木村尚三郎、青木 保、猪口 孝、北本正孟、福原義春、松岡正剛 丸山茂徳、森 洋子		
第5回	平成10年10月6日	宇奈月国際会館	とやまから21世紀 ～そうだ、とやまへ行こう～
	木村尚三郎、島森路子、福原義春、丸山茂徳、涌井雅之		
第6回	平成11年11月18日	富山国際会議場	とやまから21世紀 ～21世紀の女性そしてとやま～
	木村尚三郎、赤井士郎、岡本真佐子、佐伯順子、野村乙美、宮下孝晴		
第7回	平成13年10月11日	黒部市国際文化センター	21世紀のとやま像 ～住んでよし、訪れてよしの富山県づくり～
	木村尚三郎、石鍋 裕、白石真澄、深井晃子、吉田忠裕		
第8回	平成14年10月15日	富山全日空ホテル	富山を世界の舞台に
	木村尚三郎、片倉もところ、セーラ・マリ・カミングス、谷口 侑、野村万之丞		
第9回	平成15年10月14日	富山全日空ホテル	これからの富山県 これからの人材育成
	木村尚三郎、數土文夫、戸田奈津子、マリ・クリスティーヌ、望月照彦		
第10回	平成16年9月29日	富山全日空ホテル	とやまの文化力を高める
	木村尚三郎、金田章裕、佐藤陽子、吉田忠裕		
第11回	平成17年11月17日	富山全日空ホテル	子どもの教育目標をどこに置くか
	木村尚三郎、小林 登、佐藤友美子、西館好子、米田祐康		



財団法人 富山県ひとづくり財団

〒930-0018 富山県千歳町1-5-1 (富山県教育記念館2階)  
TEL.076-444-2000 / FAX.076-444-2001

